

■若手に読んでもらいたい本

下村政嗣のおすすめ
千歳科学技術大学理工学部 教授

分野：自然科学全般
書籍名：「日本人の自然観」寺田寅彦
随筆集 第五巻
著者名：寺田寅彦
出版社：岩波書店
出版年：1963年
価格：756円

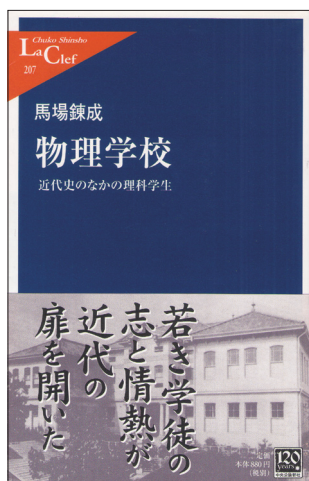
再読、「日本人の自然観」

日本は、世界で最も“科学の進歩に懐疑的な人が多く”、“自然との共生を望む人が多い”国らしい。札幌で開催した年次大会の特別企画で、三菱総合研究所の亀井信一さんは、「第三の産業革命とバイオミメティクス」と題した講演で、Industrie 4.0^(S)を提唱したドイツの産業行政、科学技術、文化風土を日本と比較するために上記の世界ランキングを紹介した。また、ドイツの博物館・美術館の数が、フランスの1,300、イギリスの1,800に比べ、6,000とダントツに多いことに言及し、“自然を科学する文化風土がシステムという考え方によるイノベーションであるIndustrie 4.0の背景にある”、と分析した。ちなみに、日本は1,200であるが、人口比にすると必ずしも多いとは言えない。さらに最近の文科省の調査では、日本人の科学リテラシー^(S)は欧米に比べて著しく低いのである。バイオミメティクスの講演をすると、よく、生物に学ぶという考え方は日本人に合っている、という感想を聞くことが多い。そう思う。しかし、

残念ながらバイオミメティクスに対する産業界、行政の動きは、バイオミメティクスの国際標準化を提案したドイツに比べて、完全に周回遅れであることは否めない。寺田寅彦は、“環海の島嶼である”日本の自然環境が、無常という日本人に特徴的な美意識、自然観に影響していることに言及し、“それは長所であるとともに短所であり、自然科学の発達には不利であった”、と結論している。“I'm not trying to imitate nature; I'm trying to find the principles she's using.”という建築家バックミンスター・フラーの姿勢は、寺田の指摘どおり、残念ながら日本からは出て来なかった。無常感に基づく科学技術があれば、きっと持続可能性に寄与するものと思われる。“世界から桜の花が消えてしまえば世界はやはりそれだけさびしくなるのである”（寺田寅彦、日本人の自然観より）。



■若手に読んでもらいたい本

伊藤大道のおすすめ
愛媛大学大学院理工学研究科 講師

分野：一般
書籍名：物理学校 近代史のなかの理科学生
著者名：馬場錬成
出版社：中央公論新社
出版年：2006年
価格：880円（税別）

小説「坊っちゃん」は愛媛大学のある松山を舞台にしていますが、すべて架空の名称で描かれています。それで、主人公の坊っちゃんが卒業した物理学校もフィクションだと思っていました。しかし、物理学校は実在し（現在の東京理科大学）、しかも日本における理学普及の礎であったことを、この本で知りました。

まだごく一部のエリートが外国語によってのみ理学を学ぶことができた明治14年、理学を学んで大学を出た若者たちは、理学が普及しなければ日本の発展はないという高い理想を掲げ、日本語による理学の普及を目的に物理学校を開校しました。この若者たちは、昼はそれぞれ勤めを抱えており、夜になるとボランティアで教壇に立っています。そして、強い意志をもって幾多の苦難を乗り越えていきました。「物理学校」は、人材育成を通して日本の近代を切り開

いた若者たちの、波瀾万丈のノンフィクションです。

本を読んだとき、私はこの若者たちと同年代でした。未来を創造する能力をもった人材を社会に送り出したいという、彼らと同様の願いも当時からもっていました。いまの日本の科学技術発展の原点には、高い理想と強い意志をもった若者がいたのだということはこの本で知り、感激したことを覚えています。

ところで、坊っちゃんは物理学校での成績は下のほうだったと言っています。でも実際は卒業率が数%と厳しかったので、下のほうでは卒業できません。「坊っちゃん」の物理学校は、やっぱりフィクション？

*^(S)は、e! 高分子のSupporting Informationにハイパーリンクされています。